

招待席

萩原 恭次郎

はぎわら きょうじろう 詩人 1899.5.23 - 1938.11.22 群馬県勢多郡に生まれる。萩原朔太郎に識られて詩作に向かい、意外性に富んだ詩形と感情で社会性に富んだシュールな詩風で時代に衝撃を加えた。掲載作は大正十四年十月刊の詩集『死刑宣告』より掲出。

愛は終了され

母の胸には 無数の血さへにじむ爪の跡！
あるひは赤き打撲の傷の跡！
投石された傷の跡！ 歯に噛まれたる傷の跡！
あゝそれら痛々しい赤き傷は
みな愛児達の生存のための傷である！

忘れられぬ乳房はもはや吸ふべきものでない
転居の後の如く荒れすたれ
あゝ 愛はすでに終了されたのだ！

さるを今 ふたゝび母の胸を蹴る！
新らしき世紀の恋人のため！
新らしき世界に青年たるため
あゝ われ等は古き父の遺跡を
見事に破壊するを主義とする！